

羨ましい同級生

鳥取大学 小笠原 拓

澤田先生とは、両輪の会の合宿で何度かお会いしているが、そこまで色々なことを話したという記憶は、ほとんどない。当時、私は大学院生になったばかりで、大学の先生方や現職の先生方の熱気に少々戸惑い気味であった。何となく身の置き所がなさそうな表情をしていた私に、それとなく声をかけて頂いたという記憶がぼんやりと残っている程度である。多分、緊張して、しつかりとした話もできなかったのだと思う。

澤田先生に対する印象は、むしろ大学院生時代の同級生である相江智也君を通じてのものが大きい。現在、新聞記者として活躍している相江君は当時から反骨精神が強く、大学や教員といった権威的なものに対する評価はいつも辛口であった。その彼が、高校時代に教えを受けた澤田先生のことを特に褒めていたので、強く印象に残っていたのだ。

今回、改めて連絡を取り、澤田先生の授業について、いくつか話を聞かせてもらった。なかでも「よむいか通信」のことは、今でも深く心に

刻まれているようだ。以下、彼からのメールの一部をそのまま引用する。

小中学校時代、私は自分で作文を書いたことがありません。読書感想文も日記も、すべて母親が書いたものを一字一句たがわず、書き写すだけでした。原稿用紙に書かれた「完成品」を延々と写し、自分の考えと違う文章で、賞をもらう罪悪感。親の作文と自分の感想とのギャップに耐えられず、本を読むこともやめました。高校3年の「よむいか」の授業で「読むってどんなことかな？」と考える時間がありました。評論文の単元で、生徒の意見が分かれる場面があり、「思ったことを書いてみよう」とわら半紙が配られました。私が書いた、「読むことは自分を知ること。他の人とは違う考えを持つ自分に気付くことだと思います」という言葉が、「よむいか通信」に取り上げられました。大げさなようですが、初めて自分の考えが認められた気がしました。

両輪に掲載されていた「よむいか通信」を読むと、学生たちが「読むこと」に惹きつけられていく様子が、手に取るようにわかる。こんな授業を受けることができた同級生が本当に羨ましい。と同時に、私もまた、「読むとはいかなることか」を改めて考えてみたいと強く感じている。